

43213

教科書文庫

4

8/10

31-1938

25000

28297

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

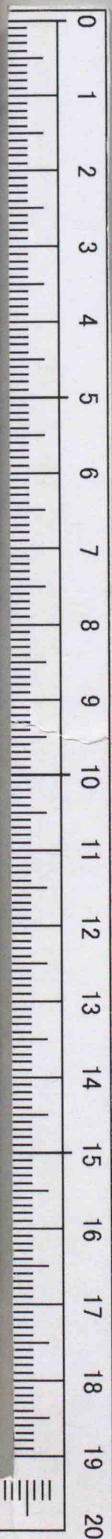


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



小學國語讀本

文部省

尋常科用

卷三





小學國語讀本

文部省

登錄番号	28297
分	375.98
類	M

卷三

尋常科用

もくろく

一	春が来た	一	十三	牛若丸	四十一
二	なはとび	四	十四	とんぼ	四十六
三	うさぎ	六	十五	一寸ボフシ	四十八
四	とび	八	十六	かちく山	六十一
五	しりとり	十	十七	ねずみのちゑ	六十九
六	ひよこ	十三	十八	キンギョ	七十二
七	かんがへもの	十五	十九	花火	七十五
八	とけい	十八	二十	金のものを	七十八
九	うちの子ねこ	二十二	二十一	自動車	九十二
十	蛙	二十四	二十二	長い道	百
十一	國びき	三十	二十三	むしば	百二
十二	サ、舟	三十六	二十四	浦島太郎	百七

尋國三

たが にごと とさ もの

一 春が来た

春が来た、

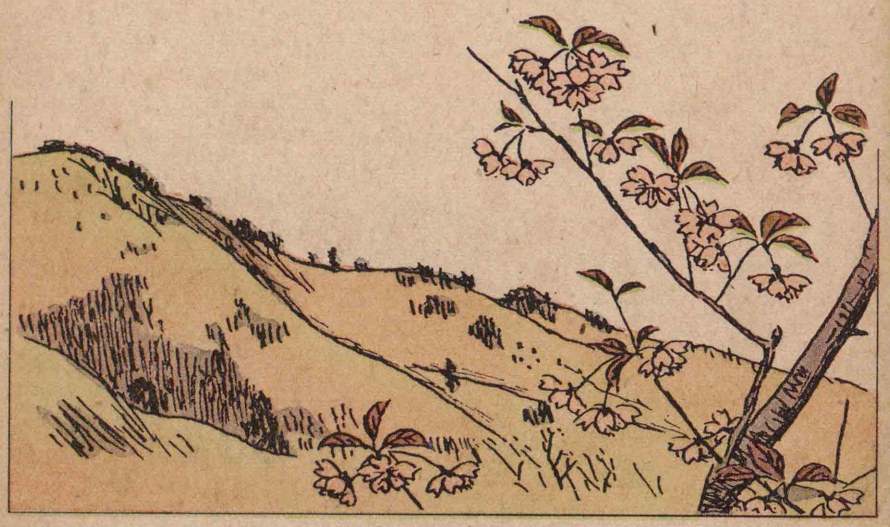
春が来た、

どこに来た。

山に来た、

さとに来た、

のにも来た。



一 春が来た

一

く

花がさく、
 花がさく、
 どこにさく。
 山にさく、
 さとにさく、
 のにもさく。



なり
で

とりがなく、
 とりがなく、
 どこでなく。
 山でなく、
 さとでなく、
 のでもなく。



んだ びは

二 なはとび

一だん、二だん、

なは とんだ、とんだ。

三だん とんだ、

四だん も とんだ。



二 なはとび

四

ていづつ

五だん の なは も、

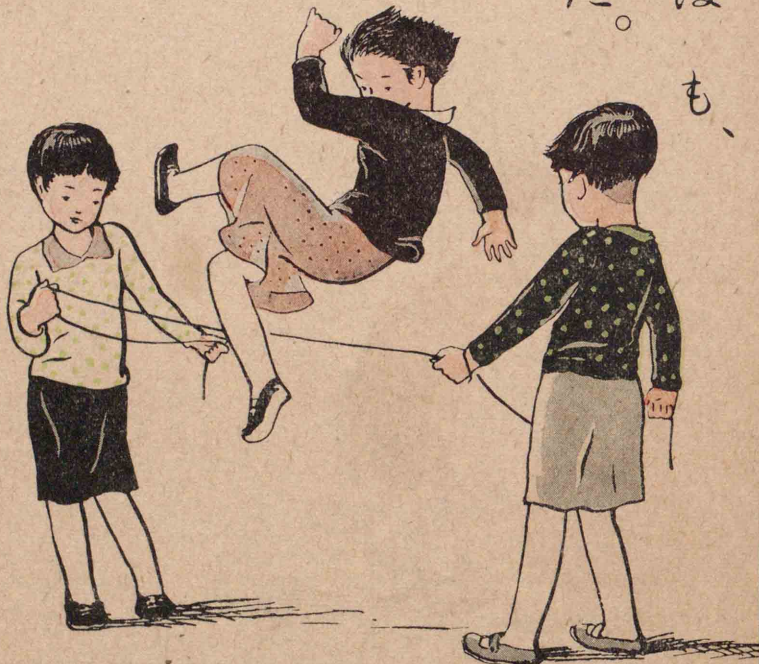
つづいて とんだ。

六だん、七だん、

八だん とんだ。

九だん、十だん、

なは とんだ、とんだ。



尋國三

二 なはとび

五

を まね び ろよ す

赤い。
おには に
出すと、
よろこんで、
ぴよん ぴよん
はねます、
をどります。



三 うさぎ

七

尋國三

お か ぎう

三 うさぎ
白い、
かはいい
うさぎさん。
お耳が
長い、
目が



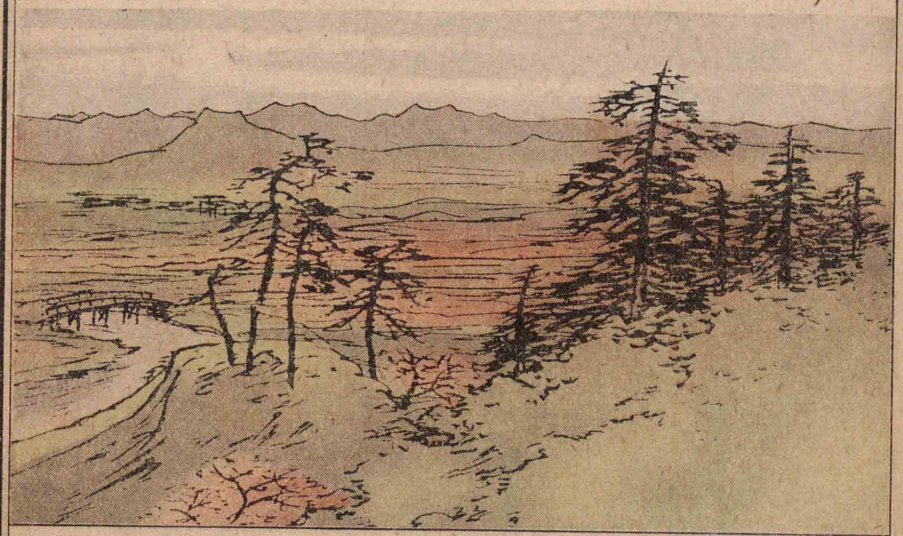
三 うさぎ

六

四とび

ひわきる

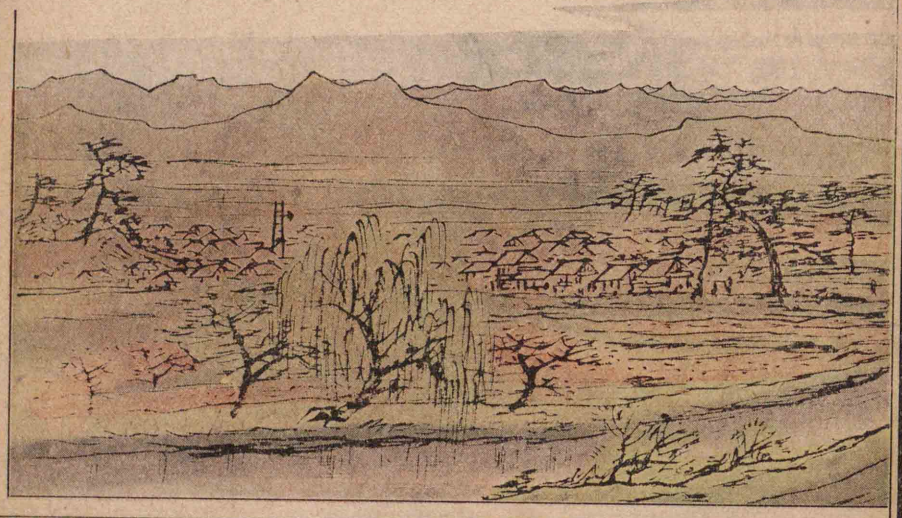
とびがなく、
 春の空。
 まるい、大きい
 わをかいて、
 びいひよら、びいひよら、
 びいひよら。



尋國三

ちあ

森の上でも、
 ないてゐる。
 まちの上でも、
 ないてゐる。
 びいひよら、びいひよら、
 びいひよら。

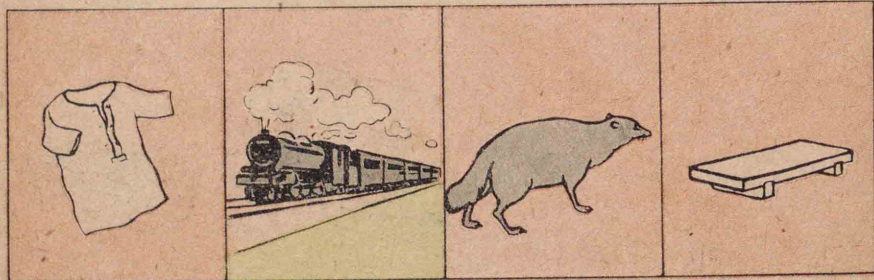


え

ぬ

ゆき子「山。」
 花子「まですね。」
 ゆき子「さうです。山ですから。」
 花子「まないた。」
 太郎「たぬき。」
 ゆき子「きしゃ。」
 花子「しゃつ。」
 太郎「つくえ。」

五 しりとり



十一

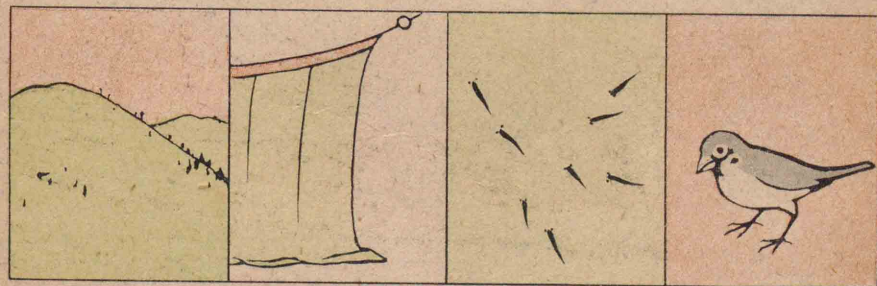
や

ず

めじらゆ し

五 しりとり
 太郎「ゆき子さんから はじめて
 ください。」
 ゆき子「では、いひますよ。」
 すずめ。「
 花子「めだか。」
 太郎「かや。」

五 しりとり



三 尋 國 三

十

ゆき子「急はがき。」

花子「きつぱ。」

太郎「ふですか。」

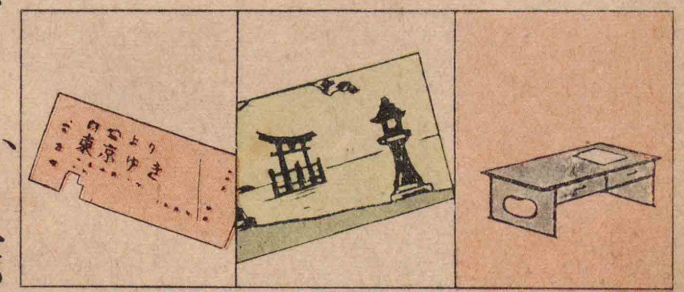
花子「さうです。」

太郎「ふはこまるな。」

ゆき子「早く、早く。」

花子「早く、早く。早くつづけな」と、太郎

さんのまけですよ。」



字國三
字國三

あむ ぼ へ

六 ひよこ

おとうさんが、

「太郎、ひよこがかへったよ。」

とおっしゃいました。

ぼくが見にいくと、ひよこが、お

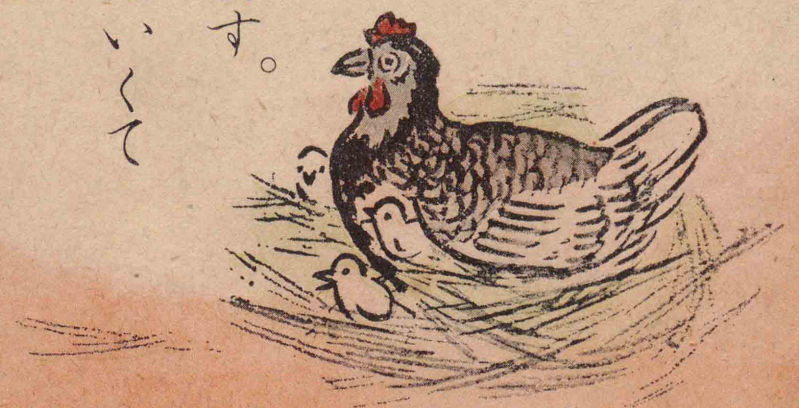
やどりのむねの所から、小さなあ

たまを出して、ぴよ、ぴよ、とないて

六ひよこ

せ ば

わます。はねの下にも、
 二三ばあるやうです。
 ひよこがなくと、
 おやどりは、はなし
 でもするやうに、
 こ、こ、こ、こ、といひます。
 ぼくは、ひよこが
 かはいくて
 たまりません。



幸國三

ざぶ そ ご

七 かんがへもの

「このはこの中に、おもしろい人
 がわます。あててごらんなさい。」
 「そのはこをかしてください。」
 「はい。」
 「ぶつてもようございますか。」
 「はい。」

七かんがへもの

え れ

「大そう かるう ございますね。この人は、どんな いろの きものを きて みますか。」

「赤い きものを きて みます。」

「それでは、をんなでせう。」

「いいえ。」



尋國三

げぢ ほ

「それでは、をとこの子ですか。」

「いいえ。としよりです。」

「どうも こまりました。どんな かほを して みますか。」

「かほぢゆう ひげだらけです。」

「それでは、手も あしも ないでせう。」

「はい。」

「わかりました。だるまさんです。」

八とけい

ぼくのうちに、大きなぼんぼんどけい
 があります。あさからばんまで、「かつ
 ちん、かつちん。」とうごいてゐます。
 まいあさ、ぼくが目をさますころ、
 「ぼん、ぼん、ぼん、ぼん、ぼん、ぼん。」
 と、六つなります。学校へいく時や、

かへった時に、ぼくはきつととけい
 を見ます。おかあさんも、ときどきごら
 んになつて、

「そろそろ、ごはんのしたくをしませ
 う。」

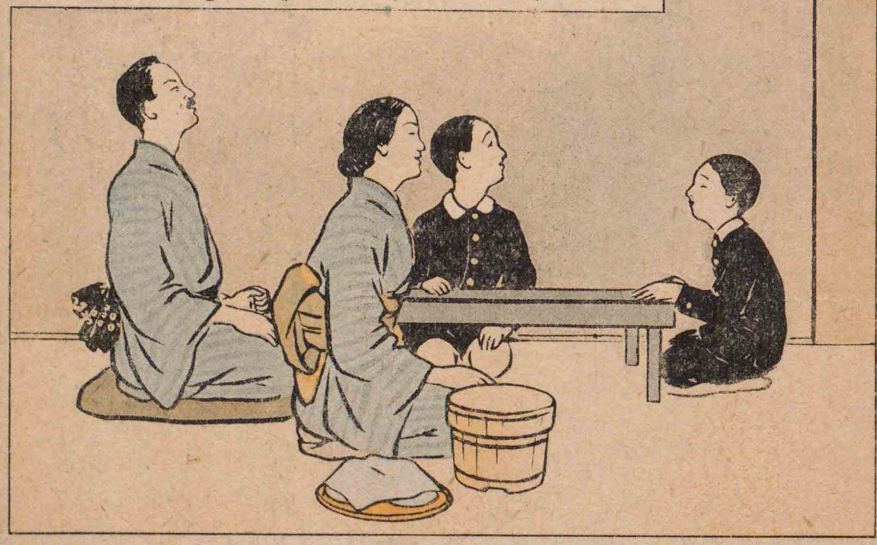
などとおっしゃいます。

きのふ、ぼくが学校からかへつて來
 て、見ると、とけいがありません。おか

あさんにきくと、
 「ぐあいがわるくなったから、とけい
 やへなほしにやっただのです。」
 とおっしゃいました。「かつん、かつん。」
 といふ音がきこえないので、なん
 となくさびしいきがしました。
 けさ、ごはんの時に、
 「もう七時かな。」

尋常三

と、いっ
 て、に
 いさんがとけいを
 見ようとしたので、
 ぼくがわらひしま
 すと、みんなが大
 わらひをしました。
 けれども、学校に



く時、ぼくも、ついとけいを見よう
としましたので、そばにおいでに
なった。おかあさんが、おわらいになり
ました。

九うちの子ねこ

うちの子ねこは、
かはい子ねこ。

くびの小すずを
ちりちりならし、
すそにからまり、
たもとにすがる。

うちの子ねこは、
かはい子ねこ。
くびの小すずを

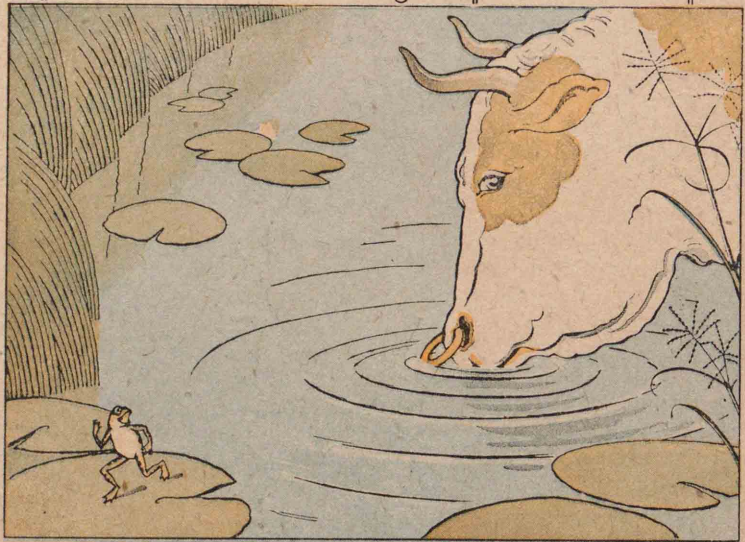


ちりちりならし、
まりとじゃれては、
えんからおちる。

十蛙

蛙の子どもが、川ばたであそんで
あまりました。
そこへ牛が来て、水をのみました。

子蛙は、びっくりし
て、にげ出しました。
子蛙は、あわててう
ちへかへりました。
さうして、おとうさん蛙
とおかあさん蛙に、
「大きい、大きいばけ
ものが、水をのみに来ましたよ。」



今

と いひました。

きんじよに、また大蛙が、それをきいて、

「その大きなばけものは、わたしくらゐもあつたかね。」

と ききました。

子蛙は、

「どうして、どうして。今まで見たこと

吸

もないほど大きいのです。」

とこたへました。

大きいのが、じまんの大蛙は、うんといきを吸ひこんで、おなかをふくらませて、

「そんなら、このくらゐもあつたかね。」
と、いひました。子蛙はくびをふつて、
「とてもそんなものではありません。」

と いひました。

「では、このくらゐかね。」

と いて、大蛙は、一そうおなかをふくらませました。

子蛙は、

「をぢさん、およしなさい。いくらおなかをふくらませても、かなひませんよ。」
と いひました。

尋國三

生

ぼ



すると、「ぼん。」と 大きい音がして、大

しかし、大蛙は、こんどこそと、一生けんめいになって、いきを吸ひこみました。おなかは、まるでふうせん玉のやうにふくれました。

蛙のおなか、が、やぶれてしまひました。

十一國びき

大むかしの こと です。

神さまが、どうかしてこの國をもつと
ひろくしたい と、おかんがへになりま
した。國をひろくする には、どこか
の あまつた 土地をもつて 来て、つぎあ

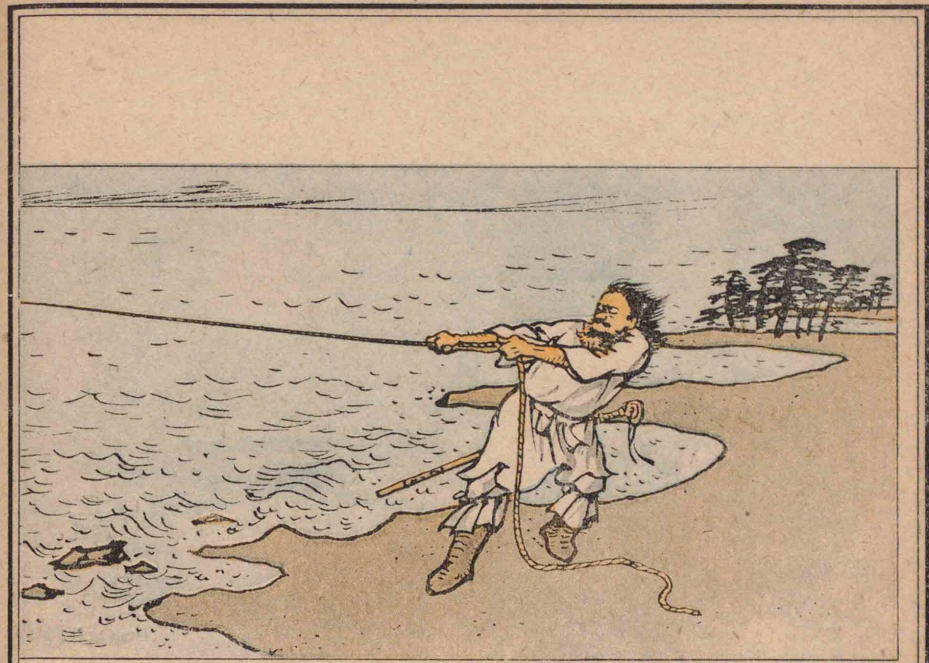
ぶ 國 神 土地

はせたら よからう と、おかんがへにな
りました。

東 太 力

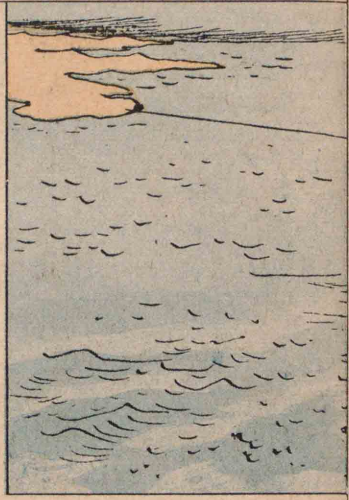
神さまは、うみの上を、ずっと お見
わたしになりました。すると、東の方
のとほい 國に、あまつた 土地のある
のが 見えました。

そこで、神さまは、その 國に、太い、太
いつな をかけて、ありったけの力を



出して、おひきになり
 ました。
 「こっちへ来い、
 えんやらや。
 こっちへ来い、
 えんやらや。」
 と、かけごゑいさましく
 おひきになりますと、

舟



その土地がちぎれて、
 うごき出しました。さうし
 て、大きな舟のやう
 に、うみの上を、ぐんぐんとこっ
 ちへやって来ました。
 神さまは、その土地をこの國に
 つぎあはせて、國をひろくなさいました。
 しかし、まだせまいとおかながへに

西

なりました。

そこで、また うみの上をお見わたし
になりました。こんどは、西の方の
とほい 國に、やはり あまった土地の
あるのが 見えました。

神さまは、その 土地にも つなを か
けて、

「こっちへ来い、

ば

えんやら や。

こっちへ来い、

えんやら や。」

と、カ一ぱい おひきになりました。こ
れも、大きな舟のやうに うごいて、
こっちへやって 来ました。

神さまは、かうして にっぽん 日本の 國をひ
ろく なさったと いふ ことです。

十二 サ、舟

雄

太郎「正雄サン、サ、舟ヲ ナガシテ アソビ
マセウ。」

正雄「ア、サウ シマセウ。サ、舟ノ キヤウ
サウ ヲ シマセウ。」

次

太郎「次郎チャン モ、ナカマニ オハイリ ナ
サイ。ネエサン ハ、シンバンキンニ ナツ

人

下土

テ クダサイ。」

ミヨ子「ハイ、ナリマセウ。」

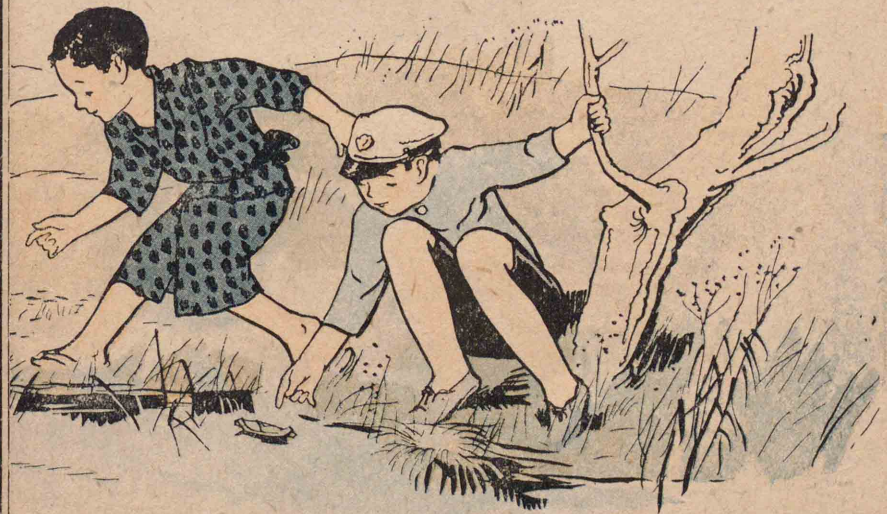
三人 ハ、メイク サ、ノ ハヲ トツテ、
舟ヲ コシラヘマシタ。

ミヨ子サン ハ、川下ノ 土バシノ 上
ニ 立チマシタ。

ミヨ子「サア、私ガ、一、二、三、ト イツタラ、
一シヨ ニ 舟ヲ 出スノ デスヨ。」

草

一、二、三。
 三人ハ、一シヨニ舟
 ヲ出シマシタ。
 舟ハ、土バシノ方
 へナガレテイキマス。
 三人ハ、舟トナラ
 ンデ、川ノフチヲ
 カケテイキマス。草ノ



近

ハニトマツテキタ
 テフクガ、トビ立ち
 マシタ。
 『ミヨ子』アラ、テフクガ、
 次郎チャンノ舟ニ
 トマリマシタ。
 舟ハ、ダンク、土バ
 シヘ近クナリマス。



次郎「ホウラ、モウ チキ ショウブダ。」
 ミヨ子サン ハ、
 「一チャク、次郎チャン。」
 ト、大キナ コエ デ イヒマシタ。
 正雄「次郎チャン、バンザイ。」
 太郎「次郎チャン、バンザイ。」
 ミヨ子「次郎チャン ノ 舟 ニハ、テフクノ
 センドウサンガ ノツタ カラ、カッタ ノ

デセウ。

十三 牛若丸うしわかまる

橋
 月のよい ばんでした。
 牛若丸が、ふえを 吹きながら あるいて
 ゐました。
 五でうの 橋に 來ますと、
 「まで。」

男 用 べ 刀 千 本

と いふ 物 が あり ます。

見 る と、大 な ぎ な た を も っ た、大 き な 男
が 立 っ て め ます。

牛 若 丸 は、

「だ れ だ。なん の 用 か。」

と い ひ ま し た。

「べ ん け い だ。そ の 刀 が も ら ひ た い。
よ い 刀 を 千 本 あ つ め る つ も り で、

百 取

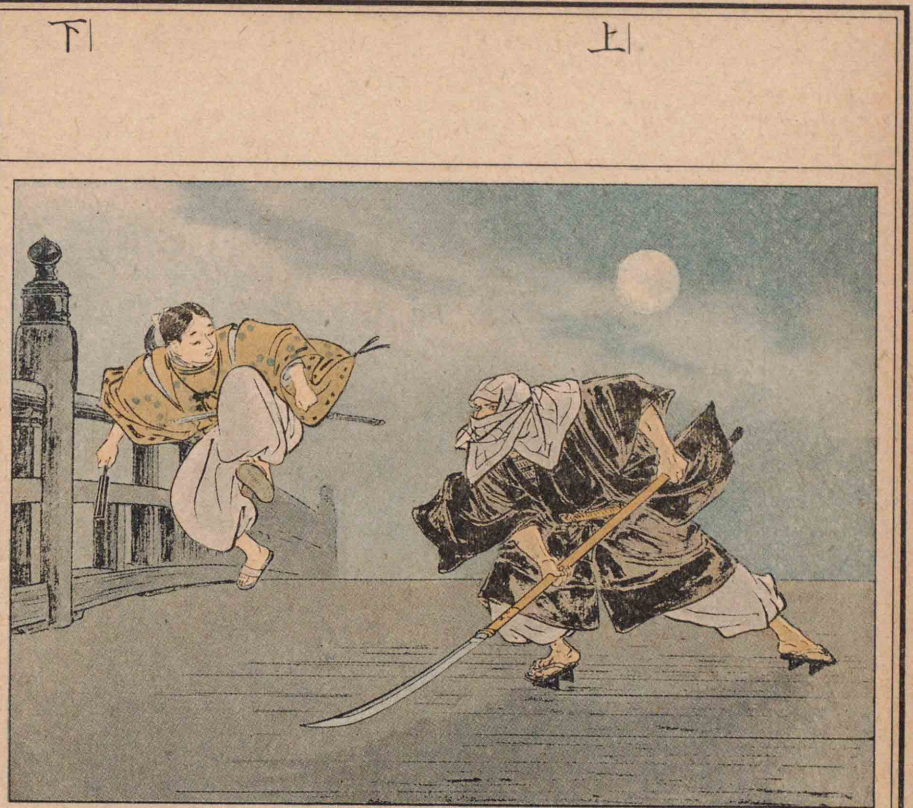
九 百 九 十 九 本 は 取 っ た。も う 一 本 で
千 本 だ。さ あ、刀 を 出 せ。」

牛 若 丸 は、び く と も し ま せ ん。

「刀 が ほ し い か。ほ し け れ ば、取 っ て み
よ。」

と い ひ ま し た。

べ ん け い は、大 な ぎ な た を ふ り ま は し て、
き っ て か、り ま し た。



牛若丸は、ひらりとらんかんの
上にとび上りま
した。
べんけいが上
をきると、牛若
丸は下へと
び下ります。右を

強

きれば、左へとびのき、左をきれば、
右へとびのきます。強いべんけいも、
だんくつかれて来ました。
牛若丸は、その時、あぶぎでべんけい
のうでを強くたきました。べんけい
の大なきなたが、がらりとおちてしま
ひました。
とうく、べんけいはかうさんしました。

さうして、牛若丸のけらいになりまし
た。

十四 とんぼ

とんぼ、とんぼ。
庭のかきねに、
とんぼが一ぴき
とまった。



尋國三

庭

指

羽

ぐるり ぐるり、
指でわをかくと、
ぎらり ぎらり、
目玉が光る。

ちよつと羽を
つまろうとしたら、



すいと、あっちへ
にげて いった。

十五 一寸ボフシ

オチイサン ト オバアサン ガ アリマシタ。
子ドモ ガ ナイ ノデ、
「ドウゾ、子ドモヲ 一人 オサツケ 下サイ。
ト、神サマ ニ オネガヒ シマシタ。」

一人
下

寸

名

高

男ノ子 ガ 生マレマシタ。小指 グラキノ
大キサ デシタ。アンマリ 小サイ ノデ、一
寸ボフシ ト イフ 名ヲ ツケマシタ。
一寸ボフシ ハ、ニツ ニ ナツテ モ、三ツ
ニ ナツテ モ、少シモ 大キク ナリマセン。
オチイサン ト オバアサン ハ、シンパイ
シテ、

「一寸ボフシノ セイガ、高ク ナリマス

日毎

ヤウニ。

ト、毎日、神サマニオイノリシマシタ。
ケレドモ、ヤツパリ生マレタ時ノマ、
デシタ。

一寸ボフシハ、十三ニナリマシタ。アル
日、オチイサントオバアサンニ、

思行

「ミヤコへ行ッテ、エライ人ニナリ
タイト思ヒマス。少シノアヒダ、オ

針

ヒマヲ下サイ。

トイヒマシタ。

一寸ボフシハ、オバアサンカラ、針ヲ
一本モラヒマシタ。ソレヲカニシテ、
ムギワラノサヤニ入レテ、コシニ
サシマシタ。ソレカラ、オワンヲモラッテ、
舟ニシマシタ。オハシヲモラッテ、カ
イニシマシタ。

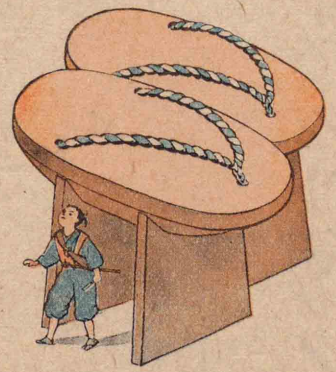
一寸ボフシ ハ、オワンノ舟ニノツテ、
 オハシノカイデ
 ジャウズニコイデ、
 大キナ川ヲノ
 ボツテ行キマシタ。
 ミヤコニツクト、
 トノサマノ。オヤシ
 キヘ行キマシタ。



々

「ゴメン 下サイ。」
 トイフト、トノサマガ 出テ オイデ
 ニナリマシタ。ガ、ダレ モ 弁マセン。
 「ダレ ダラウ。」
 トイッテ、方々 オサガシニナリマシタ。
 「トコ・ニ 弁ル ノ ダラウ。」
 トイッテ、庭ヲ見マハシナガラ、アシダ
 ヲオハキニナラウトシマシタ。スル

ト、ソノ アシダ ノ カゲ ニ 杵タ 一寸
 ボフシ ハ、
 「ブンデ ハ イケマセン。」
 ト イツテ、アワテテ ト
 ビ出シマシタ。サウシテ、
 「ケライ ニ シテ 下
 サイ。」
 ト タノミマシタ。



尋國三

遠

トノサマ ハ、
 「ゴレ ハ オモシロイ 子ダ。」
 ト イツテ、ケライ ニ ナサイマシタ。
 三年 バカリ スギマシタ。一寸ボフシ ハ、
 アル日、オヒメサマ ノ オトモ ヲ シテ、
 遠イ 所 へ 出カケマシタ。
 トチュウ マデ 來ル ト、ドコ カラ カ、オ
 ニガ 出テ 來テ、一寸ボフシ ヤ オヒメ

向

サマヲタベヨウトシマシタ。
 一寸ボフシハ、針ノ刀ヲヌイテ、オ
 ニニ向カヒマシタガ、トウクツカマツ
 テシマヒマシタ。
 オニハ、一寸ボフシヲツマンデ、一口
 ニノンデシマヒマシタ。
 一寸ボフシハ、オニノオナカノ中
 ヲ、アチラコチラトカケマハツテ、針

ノ刀デ、チクリチクリ
 トツ、キマシタ。オニハ、
 「イタイ、イタイ。」
 トイヒマシタ。
 ソノウチニ、一寸
 ボフシハ、オナ
 カノ中カラ
 ハヒ上ツテ、ハナ



地

ノ オク ヲ トホツテ、目ノ中へ出
マシタ。サウシテ、針ノ刀デ目玉ヲ
ツ、キマハツテ、ピヨコリト地メンへト
ビ下リマシタ。

オニハ、目ノ中ガイタクテナリマ
セン。目ヲオサヘテ、一生ケンメイニ
ニゲテ行キマシタ。ウチデノコヅチモ、ワ
スレテニゲテ行キマシタ。

尋國三

オニノワスレタウチデノコヅチヲ見
ルト、オヒメサマハ、
「コレハヨイモノガアル。」
トイッテ、大ソウヨロコビマシタ。コレヲ
フルト、ナンデモジブンノ思フト
ホリニナルカラデス。ソコデ、
「一寸ボフシノセイガ、高クナルヤ
ウニ。」

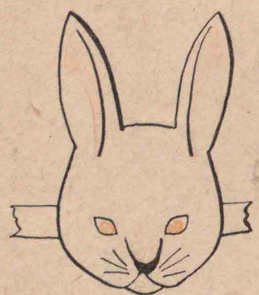
ト イツテ、オヒメサマ ハ、サツソク ウチデ
ノコヅチ ヲフリマシタ。
一寸ボフシ ノセイガ、少シ 高ク ナリ
マシタ。

「モット 高ク ナレ、モット 高ク ナレ。」
ト イヒナガラ、ナンベン モフリマシタ。
一寸ボフシ ハ、ダレ ニモ マケナイ 大男
ニ ナリマシタ。

十六 かちく山

良 作

良雄さんと 太郎さんは、ぐわようしで
めんを作つて あそぼうと、さうだんし
ました。



良雄さんは、ぐわようしに
うさぎのかほをかきま
した。耳を長くかきまし

た。目玉を赤くぬりました。
太郎さんは、それを見て、



「ぼくはたぬきにしよう。」
と、いって、たぬきのかほをかきました。はなのりやうわきから耳へかけて、茶色にぬりました。二人は、はさみで糸を切りぬいて、

茶色二人切

細合

君

めんをこしらへました。さうして、べつ
のぐわようしを細長く切つて、それを
じぶんたちのあたまに合ふやうに、
わに作つて、めんにつけました。
二人は、めんをつけてみました。よく
にあひました。

太郎「君、からく山ごっこをしようよ。」
良雄「い、な、しよう。」

紙

それから、二人は、舟をこしらへるさうだんをしました。舟は、あついで紙で二つこしらへました。さうして、長いひもをつけて、くびへかけますと、舟はおなかのへんにかゝつてゐます。良雄「うまい、うまい。うまくできた。さあ、ぼくはうさぎ、君はたぬきだよ。」

氣君

太郎「ぼくがたぬきか。よし、やらう。」
うさぎの良雄さんは、少しかんがへてから、いひ出しました。
うさぎ「たぬき君、よいお天氣だね。これから、一しよに舟あそびをしよう。」
たぬき「よからう。」
うさぎとたぬきは、舟をこぐまねをしました。

うさぎ は うたいまし
た。

うさぎ「うさぎの舟は

木舟、

たぬきの舟は

どろ舟。」

そのうち、たぬき
の舟が少しおく



れました。

たぬき「おうい、うさぎ君、ぼくの舟は、なん

だか おもくて すまない やうだ。」

うさぎ「そんなことは ないよ。君のこ

ぐの が へたな のだ。」

たぬき「さうか ね。」

また しばらく ころしました。たぬきは、だ
んだん おくれて 来ました。

助

たぬき「やあ、大へん、大へん。ぼくの舟に
 水がはいって来た。あ、舟がしづむ、
 しづむ。うさぎ君、助けてくれ。」
 いつのまにか、となりのへやに、
 良雄さんのおかあさんとねえさんが
 来て、見て、いらっしやいました。
 良雄さんも太郎さんも、気がついて、
 あわててやめました。おかあさんは、

何 年

「まあ、ほんたうにじゃうずです。ね。
 と、いって、おほめになりました。」

十七 ねずみのち急

「このごろ、なかまのものが、ねこに
 とられてこまるが、何かよいくふ
 うはあるまいか。」
 と、年とったねずみが、なかまのもの

にいひました。

その時、一ぴきの子

ねずみが、前へ出て

いひました。

「よいくふうがあり

ます。大きなすゝを

ねこの首につけ

ておいて、その音

首



尋國三

がきこえたら、にげることにして
はどうでせう。」

「なるほど、よいかんがへだ。」

と、いつて、みんなかんしんしました。す

ると、年とったねずみが、

「それもよいが、だれが、そのすゝ

をつけに行くのか。」

といひましたので、みんなだまってし

まいりました。

十八 キングョ

目ガ サメマシタ。

ユフベ 買ッテ イタバイタ キングョ ノ コ

トヲ 思フト、ジツト シテ ハ 弁ラレ

マセン。

私ハ トビオキマシタ。 サウシテ、スグ エ

持

ンガハ ニ 出テ、バケツ ノ 中ヲ ノゾ
キマシタ。 カゾヘテ ミル ト、ヤツパリ 五
ヒキ 弁マシタ。 ミシナ キレイナ、カハイ、
キングョ デス。

オカアサン ガ、ガラス ノ キングョバチ ヲ
持ッテ 來テ、

「ゴレ ニ 入レテ オヤリ ナサイ。」

ト オツシャイマシタ ノデ、私ハ、スグ キ

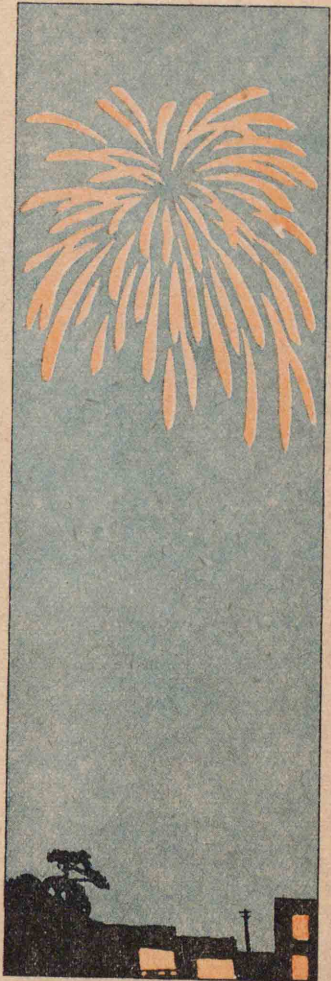
ンギョ ヲ キンギョバ
チヘ ウツシテ ヤ
リマシタ。
キンギョ ハ、前ヨリ
モ、ズツトキレイニ
見エマス。ヨコノ方
カラ ノゾク ト、キ
ンギョガ、急ニ大



急

キク 見エタリ、マタ モトノ ヤウニ、
小サク 見エタリ シマス。
ユフベ カラ 何モ ヤラナイ カラ、オナ
カガ スイテ キル ダラウト 思ッテ、私
ハ オカアサン ニ、フヲ モラッテ 來テ
ヤリマシタ。

十九 花火



どんと なった。

花火 だ、

きれい だ。

空 一ぱい に

ひろがった、

しだれやなぎ が

ひろがった。

どんと なった。

何十、何百、

赤い 星、

一度 に かはって

青い 星、

星 度

も一度かはって
金の星。

二十金のものを

木こりが、池のそばの森で、木をきってぬました。をのに力を入れて、こん、こん、ときってぬました。あんまり力を入れすぎたので、をの

深 落

が、手からはなれて、とんで行きました。「あつ。」と思ふまに、をのは、深い池の中へ、どぶんと落ちてしまいました。「あ、しまった。」と、木こりは、思はず大きなこゑを出し



生 聞

ました。さうして、まっさをな水の上を
 じつと見ながら、「どうしたらよからう。」と
 かんがへこんでゐました。
 すると、その水の中から、まっ白な長
 いひげの生えたおぢいさんが、出て
 来ました。さうして、
 「どうしたのだ。」
 と聞きました。

消

木こりは、
 「池の中へ、をのを落してしまひ
 ました。」
 とこたへました。
 「それはかはいさうだ。わたしがひ
 ろってやらう。」
 かういふと、おぢいさんのすがたは、
 すぐ、水の中に消えて、見えなくな

美

りました。

しばらくすると、おぢいさんが出て
来ました。その手には、美しい金の
ものを、きらくと光ってゐました。

「お前の落したのは、これだらう。」

「いえ、ちがひます。それでは、ございま
せん。」

「では、もう一度さがして みよう。」

銀 今

おぢいさんのすがたは、また水の中
に消えました。さうして、今度は美しい
銀のものを、持って、出て 来ました。

「では、このものをか。」

「いえ、それでも、ございませぬ。てつ
のものを、ございます。」

「さうか。では、もう一度さがして み
よう。」

おぢいさんのすがたは、また水の中
 中に消えました。
 おぢいさんは、今度こそ、木こりの
 落したてつのをのを持って、出て
 来ました。
 「これだらう。」
 「はい、それでございます。どうも
 ありがたうございました。」

受 直

木こりは、そののを受取って、何べん
 もおれいをいひました。おぢいさんは、
 「お前は、ほんたうに正直な男だ。こ
 の二つののを、お前にあげよう。」



近所話若

と、いいながら、金のものをと、銀のものを木こりにやりました。木こりは、ふしぎなおぢいさんから、金のものをと、銀のものをもらったこと、を、近所の人に話しました。となり、若い男も、木こりでした。それを聞くと、じぶんも金のものをや、銀のものがほしくなりまし

た。

若い男は、池のそばの森へ行きました。をので、こん、こん、と木をきりはじめました。

そのうちに、若い男は、わざとをの手からはなしました。をのは、どぶんと池の中へ落ちました。

「あ、しまった。」

と、若い男は、できるだけ大きなこ
 ぶでさげんで、水の上を見てみ
 ました。
 青い水の中から、おぢいさんが出
 て来ました。さうして、
 「どうしたのだ。」
 と聞きました。

「池の中へ、をのを落してしまひ

ました。」

と、若い男はこたへました。

「それはかはいさうだ。わたしがひ
 ろってやらう。」

かういふと、おぢいさんのすがたは、
 すぐ、水の中に消えて、見えなくな
 りました。

若い男は、金のものをのことばか

り かんがへて、まっつて めました。
 しばらくすると、水の中から、おぢ
 いさんが 出て 来ました。その 手には、
 美しい 金の きのが、きらくと 光つ
 て めました。

「お前の 落した のは、これ だらう。
 若い 男は、すぐ、
 ばい、それで ございます。」

と、いって しまいました。
 すると、今 まで やさしさうに 見えて
 めた おぢいさんの かほが、急に き
 つく になりました。 さうして、

「お前の や
 うな うそつ
 きには、金
 の きのも、



銀のものをやることはできない。と、
いって、すぐ、水の中に消えてしまひました。

二十一 自動車

オヒルカラ、私ハ、正雄サンノウチ
ヘアソビニ行カウト思ッテ、外へ
出マシタ。

止 急

トチュウマデ來テ、フト見ルト、チャウ
ド正雄サンノウチノ前ニ、自動車
ガ止ッテキマシタ。ソバニ、人が四五
人ヨッテキマシタ。

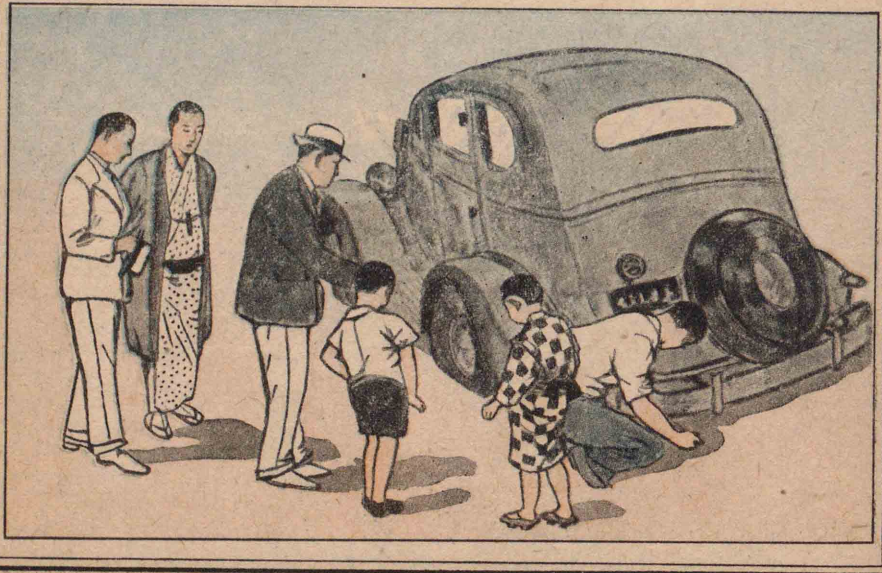
「何ダラウ。」ト思ッテ、私ハ急イテ行ッ
テ見マシタ。正雄サンガキマシタノデ、
「何デス。」

ト聞キマス ト、正雄サンハ、

知

「自動車ノコシヤウデス。
 トイヒマシタ。
 「ドンナコシヤウデス。
 ト聞キマシタガ、正雄サンモヨクワ
 カラナイト見エテ、ダマツテキマシタ。
 ソノ自動車ニノツテ來タラシイ、三人
 ノ知ラナイヲヂサンガ、立ツテキマシタ。
 ソノ中ノ一人ガ、

「アノ左ガハノウ
 シロノ車ヲゴ
 ランナサイ。」
 トイヒマシタ。見ル
 ト、ソノ車ノタ
 イヤガヒシヤゲテ
 キマシタ。
 「タイヤガヒシヤゲ



テキマスネ。ヤブレタノデセウカ。
 トイヒマス ト、ヲヂサン ハ、
 「アノ タイヤノ 中ニ、モウ 一ツゴ
 ムノ クダガ アルノ デス。」
 トイヒマシタ。私 ハ、オトウサンノ ジ
 テン車ガ、サウ ナツテ キル コトヲ 思
 ヒ出シテ、
 「ア、ソノ クダガ ヤブレタノ デスネ。」

九十六

別 間 空

トイヒマス ト、ヲヂサン ハ、
 「サウ デス。中ノゴムノクダガヤブ
 レテ、空気がヌケテシマッタノデス。」
 トイヒマシタ。カウイッテキル間ニ、ウ
 ンテンシユ ハ、車ヲハヅシマシタ。サウシ
 テ、自動車ノウシロニツケテアッタ、
 別ノ車ヲ持ッテ來テ、トリツケマシタ。
 スツカリシゴトガスムト、ウンテンシユ

ハ、ヲヂサンタチ ニ、
 「サア、ドウゾ。オマチドホサマ デシタ。」
 ト イヒマシタ。ヲヂサンタチ 三人 ハ、
 「ヤア、ゴクラウ デシタ。」
 ト イツテ、自動車 ニ ノリマシタ。
 ウンテンシユ モ ノリマシタ。
 「ブルく、ブルく。」
 ト、自動車 ガ ウナリ出シマシタ。

走 動

ヲヂサンタチ ハ、私タチ ニ、
 「サヤウナラ。」
 ト イヒマシタ。私 モ、正雄サン
 「サヤウナラ。」
 ト イヒマシタ。
 自動車 ハ 動キ出シマシタ。
 「ブツ ブウ。」
 自動車 ハ 走ッテ 行キマス。

道

二十二長い道

私たちハ、自動車が
見えなクナルマ
デ、立ッテ見テ
キマシタ。

二十二長い道



長
道
三
百

百

夕

二十二長い道

どこまで行っても、
長い道。
夕日が赤い、
森の上。
どこまで行っても、
長い道。
ごうんとお寺の

百一

かねがなる。

どこまで行っても、

長い道。

もうかへらうよ、

日がくれる。

二十三 むしば

朝

花子さんは、はがいたいので、一ばん
ぢゆうくるしみました。

朝になっても、まだいたいのがな
ほりません。花子さんは、おかあさんと
一しよには、のおいしやさまへ行きま
した。

おいしやさまは、すぐ見て下さいました。
「やあ、二本ならんでむしばができて

洗

ある。おくわしを たべすぎましたね。」
 と、いって、くすりで洗ったり、くすりを
 つけたりして 下さいました。
 花子さんは、いたいのが少しなほつ
 たやうに 思いました。
 おいしゃさまは、おかあさんに、
 「この、前の方のむしばは、生えか
 はるはですが、おくの方のは、

使

一生 使ふ 大じな は です。それが、
 かう むしば になつ
 て は いけません
 ね。」
 と おつ しゃいました。さ
 うして、花子さんに、
 「花子さん、あなたは
 は を みがきます



答

夜

か。

と、お聞きになりました。

「毎朝 みがきます。」

と、花子さんは答へました。おいしやさまは、

「夜ねる前にも、みがくといいの
ですがね。さうすると、こんな
にはがわるくならないでせう。」

忘

とおっしゃいました。花子さんはうなづき
ました。

おかあさんと一しよに、おいしやさまの
おうちを出た時、花子さんは、もう
はのいたみを忘れて、にこくして
みました。

二十四 浦島太郎 うらしま

むかし、浦島太郎といふ人がありま
した。

ある日、はまべを通つてゐると、子ども
が大ぜい集つて、何かさわいでゐま
した。見ると、かめを一びきつかまへ
て、ころがしたり、たいたりして、いぢめ
てゐるのです。浦島は、
「そんなかはいさうなことをするも

の ではないよ。
と いいますと、
子どもらは、
「何、かまふもの
か、ぼくたちがつ
かまへたのだもの。」
と、いつて、なかく聞
きません。浦島は、



賣

「それなら、をぢさんにそのかめを
賣っておくれ。」

と、いって、かめを買取りました。

浦島は、かめのせなかをなでながら、

「もう二度とつかまるなよ。」

海

と、いって、海へはなしてやりました。

それから二三日のちのことでした。

浦島が、舟にのって、いつもの通り

呼

つりをしてみると、

「浦島さん、浦島さん。」

と、呼ぶものがあります。だれだらう

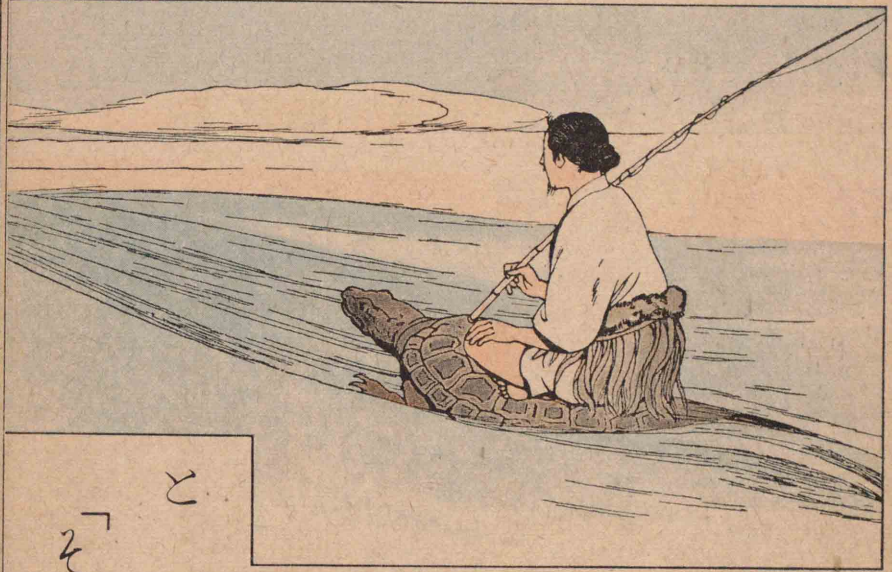
と、思って、ふりかへって見ると、大きな

かめが、舟のそばへおよいで来て、

ぴよこりとおしぎをしました。さうして、

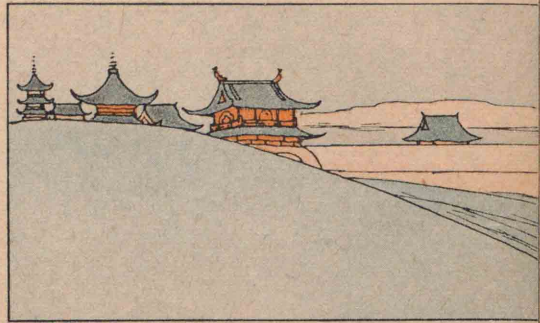
「この間は、ありがたうございました。私

は、あの時助けていた、いたかめ



です。けふは、おれいに、りゅうぐうへおつれしませう。さあ、私のせなかへおのり下さい。」
 「それはありがたう。」
 といひました。浦島は、

門黄



といて、かめのせなかにのりました。かめは、だんく海の中へはいつて行きました。
 しばらく行くと、向かふに赤や、青や、黄でぬった、りっぱな門が見えます。かめが、
 「浦島さん、あれがりゅうぐうの、ご門

間

貝

です。
 といひました。
 間もなくごてんへつきました。たいや、
 いらぬなどが、むかへに出て来て、
 おくの、りっはなごてんへ通しました。
 美しい玉や貝でかざった、そのご
 てんは、目もまぶしいほどきれい
 です。そこへ、おとひめさまが出てい

ぞ

らっしゃいました。さ
 うして、
 「この間は、かめ
 を助けて下さっ
 て、ありがたう
 ございます。どう
 ぞ、ゆっくりあ
 そんで、いって下



家

「さい。と、いって、いろいろごちそうをして下さいました。たいや、ひらめや、たこなど、が大ぜいで、おもしろいをどりをどりました。」

浦島は、あまりおもしろいので、家へかへるのも忘れて、毎日毎日、たのしくくらしつておりました。しかし、そのうち

に、おとうさんやおかあさんのことをかんがへると、家へかへりたくありません。そこで、ある日、おとひめさまに、「どうも長くおせわになりました。あまり長くになりますから、これでおとまをいただきます。」
おとひめさまは、しきりに止めました

箱

が、浦島が どうしても 聞きません の
で、

「それでは、この 玉手箱 を あげます。
しかし、どんな こと が あっても、ふ
たを あけて は なりません。」
と、いって、きれいな 箱 を おわたしに
なりました。

浦島は、玉手箱をか、へ、かめにのつ

住 死

て 海の上へ 出ました。

もとの はまべへ かへって 來ますと、
おどろきました。村の やうすは、すつか
り かはって めます。住んで めた 家 も
なく、おとうさん も、おかあさん も 死ん
で しまって、知った 人は、一人も をり
ません。これは どう した こと かと、
浦島は、箱をか、へながら、ゆめの

歩

やうに、あちらこちらと歩きまはりました。

こんな時に玉手箱をあけたら、どうかなるかも知れ

ないと思っ

て、おとひめ

さまのいっ

たことも



忘れて、そのふたをあけました。すると、中から、白いけむりがすうと立ちのぼりました。それがかほにかったかと思ふと、浦島は、かみも、ひげも、一度にまっ白になって、しわだらけのおぢいさんになってしまいました。

は	ば	だ	ざ	が	ん	わ	ら
び	び	ぢ	じ	ぎ		ゐ	り
ぶ	ぶ	づ	ず	ぐ		う	る
べ	べ	で	ぜ	げ		ゑ	れ
ぼ	ぼ	ど	ぞ	ご		を	る

も	み	さ	こ	や	ゐ
せ	し	き	え	ま	の
す	ゑ	ゆ	て	け	お
ん	ひ	め	あ	ふ	く

や	ま	は	な	た	さ	か	あ
い	み	ひ	に	ち	し	き	い
ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
え	め	へ	ね	て	せ	け	え
よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お

な	れ	わ	り	ほ	い
ら	そ	か	ぬ	へ	ろ
む	つ	よ	る	と	は
う	ね	た	を	ち	に

蛙今吸國神地東力舟西雄次草近
 橋男用刀千本百取強庭指羽寸名
 高每行思針遠向良作茶色切細合
 君紙氣助何首買持急星度金池深
 落聞消美銀受直話若自動止知間
 別走道夕朝洗使答夜忘通集賣海
 呼黃門貝家箱住死步

をはり

昭和十三年十一月七日修正印刷
 昭和十三年十一月九日修正發行
 昭和十三年十一月九日翻刻印刷
 昭和十三年十一月三十日翻刻發行

著作權所有

著作兼
發行者

文 部 省

小學國語讀本 尋常科用卷三

定價金拾參錢

翻刻發行
兼印刷者

東京市小石川區又堅町百八番地 30
日本書籍株式會社

代表者 大橋光吉

印刷所

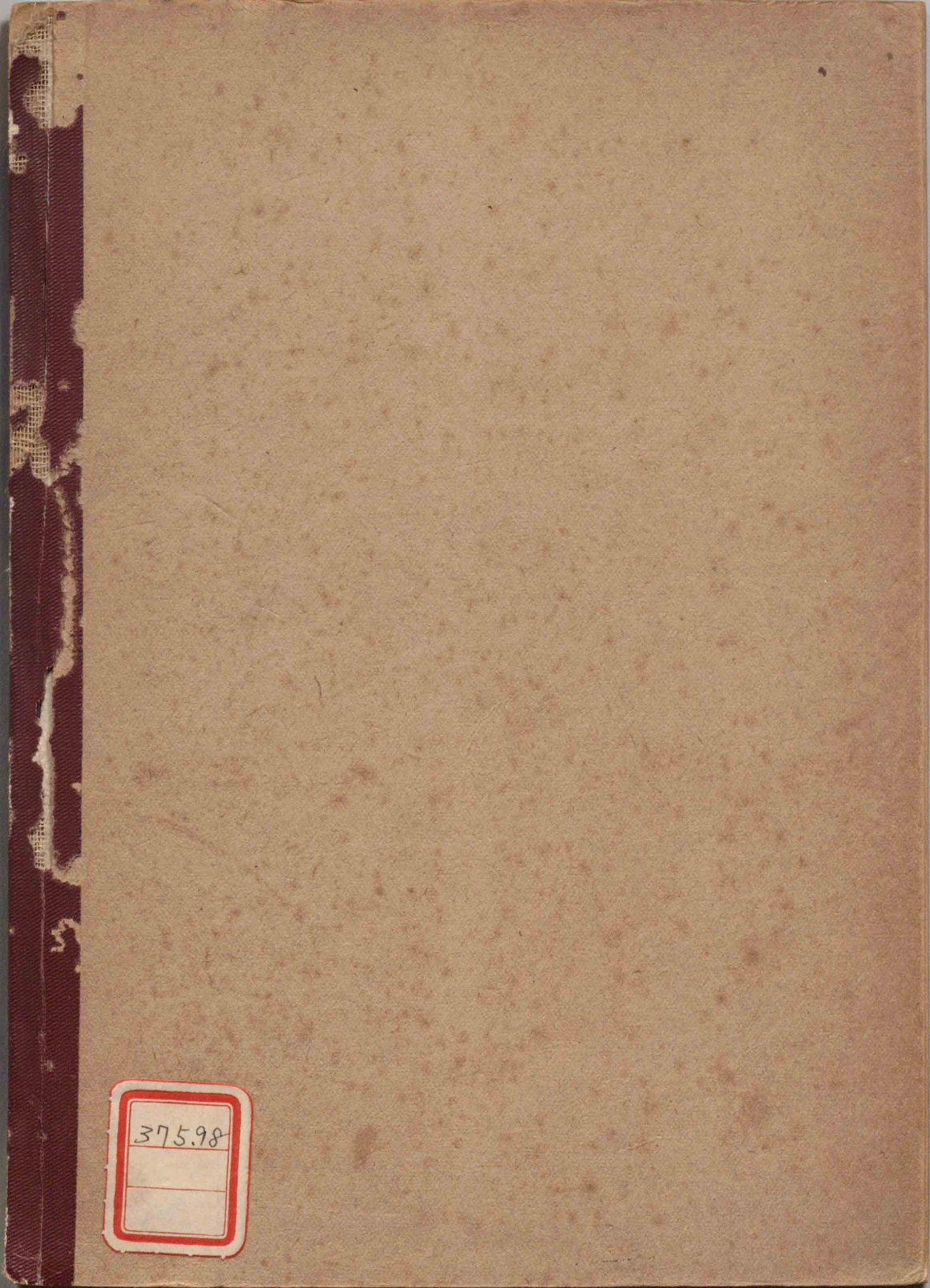
東京市小石川區又堅町百八番地
日本書籍株式會社工場

昭和三十一年十一月二十日

文部省檢査濟

發行所

日本書籍株式會社



375.98